

明治期教授法用語としての「単級」をめぐる諸問題

——「単級・多級」教授法から「複式・単式」教授法へ——

Problems of “Tan-Kyu” as a Term of Teaching Method in Meiji Era.

麻 生 千 明

序

単級学校が法制上成立した第2次小学校令期においては、ドイツ等の実情紹介等を通して単級学校（教授）の理念や実態についての理解が広く定着するようになる。そして単級学校の教授法に関しては、その理念的側面が把持されると同時に、そのわが国における具体的展開となると従前の合級教授と折衷された形として理論的形成がなされていく。そのように、いわば移入性と慣行という視点からの単級教授法の理論形成及び実態を考察した前稿^①に引き続く本稿においては、先行研究等では触れられてはいないが、しかし看過しえない問題として「単級教授法」という呼称をめぐる問題を考察することにする。「単級」ないし「単級教授（法）」という用語は文献上は第1次小学校令期^②、否、後述するように実はそれ以前からもみられるのであるが、それが“単級学校”ないし“単級学校における教授法”という意味理解に一律化されていくのは、単級（学校）が法令上明記された第2次小学校令（明治23年・1890年）及び文部省令第12号（学級編制等ニ関スル規則、明治24年・1891年）公布後のいわゆる第2次小学校令期のことであるように思われる。したがって先ず本稿の1においては、「単級（教授）」という用語についての理解がそのように一律化される以前の、第1次小学校令期およびそれ以前の単級用語理解の状況について考察することにする。次に2においては、第2次小学校令下において“単級学校における教授法”という意味で「単級教授法」に関する理論形成が推し進められる一方、「単級教授法」という呼称自体に対する批判が当初よりかなり根強く存在していた事実を明らかにする。すなわち「単級」とは元来「多級」と対置されるところの、学級数の単複に拠る学校の種別を示す用語であって、教授法ないし教授法理論上の（多級と区別される）特異性を示すものではないとする見解が、それらの批判に共通していたようである。しかもそうした批判は明治30年代以降の多級化すなわち単級学校数の相

対的低下傾向と相俟って一層顕著なものとなっていくことを指摘する。最後に3においては、上述の如き背景のなかで「単級・多級」教授法という呼称に代わる様々な用語の模索のなかで、次第に「複式・単式」教授法という呼称が一般化していく推移について述べることにする。

1. 第2次小学校令期以前における「単級」用語の理解 ——松本貢の論著を中心に——

第2次小学校令期以前において「単級（教授）」という用語についてどのような理解がなされていたかを検討する本章において、サブタイトルに掲げたように松本貢の論著を中心に考察することの意図について先ず述べておきたい。彼は後述する黒田定治（註④参照）と共に明治20（1887）年2月より、高等師範学校に付設された単級教場の主任を務め^③しかも丁度その頃に『教育時論』に寄せて「単級教授ノ方法及ビ得失」と題する論説を発表している。次いで2年後の明治22（1889）年には『教育週報』に「合級教授ノ学校」と題する論説を数回連載で執筆しており、さらにはほぼその内容そのままが『実験教授術 全』と銘打つ書物に収載され、彼と是石辰次郎との共著という形で、第2次小学校令公布後の明治25（1892）年に公刊されるという経過を跡づけることが出来る。このように第1次小学校令期から第2次小学校令期にかけて、松本貢という同一人物により相次いで発表されたこれら論著は、その発表時期といい論説標題といい、「単級」用語についての理解状況や問題の所在を優に示唆し得ることが予想されるものであった。事実その期待は、以下の論述に示されるように充分果たされたうえに、また、はからずも彼の論著は、第2次小学校令期における教授法用語としての「単級」批判の立場にと繋がっていることをも併せ確認されたのである。それでは彼の明治19（1886）年時の論説から検討していくことにする。

①「単級教授ノ方法及ビ得失」（明治19年・1886年）

——単級教授＝単級学校——

明治20(1887)年5月発行の『教育時論』74号に「単級教授ノ方法及ビ得失」と題する論説記事がある。この頃より急増する諸外国、特にドイツの単級学校や教則等の紹介記事のなかにあつて⁽⁴⁾本論説は邦人による「単級」に関する論説記事としては恐らく最初のものと思われ、その点でも極めて注目に値するものと言える。先にも触れたように、この論説の執筆である松本貢の、高等師範学校付属単級教場主任という当時の立場からも、彼のここでの見解はかなりオフ・イシャルな性格をもつものであったと見做してよいであろう。

この論説で彼は先ず明治19(1886)年5月公布の文部省令第8号(小学校ノ学科及其程度)に関して、「是迄ノ習慣ニテハ学力ノ相等シキ生徒ノ集合ヲ級ト称セシモ文部省令第8号ニテ学級トハ教授ノ都合ニ依リテ組合ヲ立テタルモノノ名称トナレリ⁽⁵⁾」と従来の等級概念から教授の組合といういわば集団概念へと転換したことを指摘する。次にそのことと関連して「単級教授」の意味について「一人ノ教員ニテ一学校ヲ管理シ全生徒ニ教授ヲ施ス所ヲ単級学校或ハ単級教授ト称ス⁽⁶⁾」と、すなわち単級教授と単級学校とを同義に扱い、「本題ハ省令ニ基キ八十人以下ノ生徒アル学校ニ於テ一人ノ教員ヲ置クトキニ適用セントスル⁽⁶⁾」ものであると述べている。省令8号を単級学校を規定した法令と見做すか否かについては論争の行われたところでもあるが(註(2)掲出拙稿参照)、松本は、省令8号の規定により全校生徒数80人(尋常科の場合)以下の学校は一教員の学校となるが、これを「単級学校」と称し、そこでの教授法を「単級教授」と称し論じているわけである。単級学校が未だ一般化していない当時としては極めて先進的な捉え方であり、それだけに一般には理解され難いところであったと推測される。

次いで彼は「独逸ニテハ全国ノ小学校中三分ノ二ハ単級学校ニシテ一人ノ教員ニテ教授ヲ司ル由⁽⁶⁾」とドイツの実情を紹介したのち「我邦ニテモ地方ニテハ一校一人ノ教員ヲ置クモノ少ナカラザレドモ……⁽⁶⁾」とわが国に於いても形態上は単級学校の少なくないことを指摘している。しかしそこでの教授法の実状については次のように批判している。

「其編制法ハ之ヲ單級トナサズシテ⁽⁷⁾多級學校ノ制ニ法リ授業生ヲ用キテ其教授ヲ助ケシムルカ否ラザレバ時間ノ⁽⁷⁾操合ヲ為シテ一人ニテ彼此ノ級ヲ掛持ノ法ヲ用キラレ未ダ全校生徒ヲ一団トシテ教授ヲ施セシ学校アルヲ聞カズ⁽⁶⁾」(傍点引用者)

すなわち外見上は一学校一教員の単級学校でありつても、その教授法の実態は授業生を多数用いての等級別教授(多級学校ノ制)であつたり、従来の合級教授のよう

に一人の教師が掛持でやったりしており、全校生徒を一団として教授する「単級教授」の形態は全く見受けられないと批判している。さらに彼は「是迄村落学校ノ教育ノ振ハザルハ主トシテ授業生ヲ以テ学校ヲ編制シタルノ弊ヨリ来ルモノナリト信ズ⁽⁶⁾」と授業生法の弊を指摘、「従前ノ如ク級数ノ多キトキハ已ムヲ得ザレドモ今ヤ尋常小学校ニテハ四学年ニ各一人ヅツノ教員ヲ要スルトスルモ四人ニテ足レバ授業生ヲ用ユルノ制ハ之ヲ廃止シ正格ノ訓導ニテ教授ヲ担任セラレンコトヲ望ム⁽⁶⁾」と述べ、生徒数160人以上で校費の充分な学校では各学年毎に正格訓導を配することが望ましいと述べる一方、「地方ノ簡易学校ハ勿論尋常小学校ニテモ授業生ヲ使用スルノ制ヲ廢シテ学級(単級学校のことか……引用者註)若クハ二級学校トナサンコトヲ望ム⁽⁶⁾」と述べている。こうした学校論は、知育よりも徳育重視という明治10年代から20年代にかけての思潮動向を反映したものであり、いわば教授学校から訓育学校へと言い得べき学校観の推移にも照応していると言えよう。

授業生法への批判とともに彼は、当時広く行われていた掛持法についても次のように述べている。「從來各地ニ於テ施コス所ノ合級教授ナルモノヲ見ルニ時間ノ操合ヲ為スヲ以テ主眼トナシ而シテ読書ニ最モ困難ナルヨリシテ概子読書時間ヲ貴重シテ之ヲ主位ニ置キ其他ノ学科ヲシテ層位ニアラム故ニ合級教授ニテ養成セラレタル生徒ハ独リ読書ノミ熟達シテ其他ノ学科ハ甚ダ未熟ナルコト通例ナリ⁽⁶⁾」すなわち掛持法が読書科のみを偏重し各科の平均が得られ難い欠点を指摘し、その弊を是正すべく同時同学科主義を提唱、その利点として以下の3点を挙げている。

- ①同科ヲ同時ニ授クル故ニ教師ハ意ヲ其学科ニ専ニスルコトヲ得生徒ハ注意ヲ一方ニ向ケテ他ニ⁽⁷⁾防害セラルルコトナシ
- ②時間ノ操合ヲ為シテ教授ヲ為ストキハ学科ニ依リテ精疎ヲ生ズベシ同科ヲ同時ニ⁽⁷⁾教科スレバ教授力ハ平均ニ配分スベシ
- ③同科ヲ同時ニ授クル故ニ甲ニ教ヘントスル所ハ乙ノ予習タラシメ乙ニ授クル所ハ甲ニハ復習トナリテ兩生共ニ其利ヲ得ベシ

すなわち同時同科主義を採用することにより教員生徒共に注意力を一点に集中しうること、各教科に平均に力を配分しうること、甲乙兩組に予習復習という形で利を与えること、などが指摘されているわけである。

(2)「合級教授ノ学校」(明治22年・1889年)——単級教授(単級学校ニハアラズ)——

前節では松本貢の明治19(1886)年の論説「単級教授

ノ方法及び得失」の内容骨子について紹介したが、彼は明治22(1889)年には雑誌『教育週報』に「合級教授ノ学校」との標題で数回に亘って論説を展開している。この論説において彼は19年時の主張点であった同時同学科主義の利を再度強調して次のように述べている。

「合級教授ニ於テ、学科ノ組合ニ種々ノ議論アレドモ、同時ニ同学科ヲ授クルノ説漸ク勢力ヲ得タリ⁽⁶⁾、余モ亦之ヲ主張スルモノナリ、蓋シ實際上大ニ利益アルモノ、如シ。彼ノ発声ノ多寡ヲ以テ組合セ、或ハ教授上手数ノ繁簡ニヨリテ組合スベシトノ説ハ、教授ノ便ノミヲ計リテ、未ダ深ク実益如何ヲ査察セザルモノナリ⁽⁷⁾。」

さらに具体的な学科組合せについて「同時ニ同科ヲ授ケテ其思考ヲ同一ノ事ニ向ケシムルハ、教師ノ為メニモ生徒ノ為メニモ、大ニ便益ナリト云フベシ、仍テ余ハ読書ハ読書ト組合セ作文ハ作文ト組合スルヲ以テ其法ヲ得タルモノト論定セントス。然レドモ、一ハ発声ノ多キヲ要シ一ハ手指ノ運用ヲ要スル等ノ学科アラバ、則チ之レヲ組合スルモ可ナルベシ、例ヘバ、図画ト習字トハ読書ト組合スルニ都合ヨキ学科ナランカ⁽⁸⁾。」と述べ「二級組合」「三級組合」「四級組合」の各々の場合の時間割例を掲記している⁽⁹⁾。

ところでこの論説標題は「合級教授ノ学校」ということであるが、明治19(1886)年時には「単級教授ノ方法及び得失」との標題のもとに、文部省令第8号によって招来される一学校一教員のいわゆる単級学校の教授法のあり方を「単級教授」と称し論じていた彼が、僅か3年後の明治22(1889)年においては「合級教授」と称し論じていることがここで注目されるのである。しかも19年時と同様、授業生法の弊を説き、かつ同時同学科主義の採用を勧奨しているところから、一教員学校(単級学校)における「単級教授」と今回の論説における「合級教授」とは同様の志向性と課題意識において捉えられていることが察せらるるのである。こうした単級と合級の捉え方は第1次小学校令期の特徴を示しているということが出来よう。(註(2)掲出拙稿参照。)

さて明治19(1886)年時に「単級教授」について論じた彼が22(1889)年時に「合級教授」について論じている理由ないし背景としては、ひとつは今述べたように単級学校の教授法と合級教授とを基本的に同じ方向性・課題において捉えていること、そして双方とも「合級教授」との呼称に包摂させているという事情が考えられるが、ここで「単級教授」という用語の意味内容に関し極めて注意を惹く次の如き叙述が同論説中にある。

「世ニ合級教授ヲ施ス学校甚ダ渺ナカラズ、而シテ此学校ノ目的ハ果シテ合級教授ニアリヤト問ヘバ、十ニ八九ハ經費ノ不足ヨリシテ已ムヲ得ズ合級トナスモノニシ

テ、本来ノ希望ハ単級教授(単級学校ニハアラズ)ニアルモノナリ。是故ニ其設備スル所ハ、合級教授ニ適シタルモノ殆ド無クシテ、只僅ニアルノミ。……蓋シ人口寡少ノ土地ニ於テハ、到底単級教授ヲ施スコト難カルベケレバ、寧ロ最初ヨリ合級ノ目的ヲ以テ其準備ヲナスニ如カザルナリ⁽¹⁰⁾。」(傍点引用者)

上記引用文中における「単級教授」とは、文脈から、また何よりも「単級学校ニハアラズ」との執筆者自身の註記からも明らかなように、単級学校の教授法ではなくて、一等級一教員受持のいわゆる単式教授の意味で用いられているのである。そのことは本論説中に「単級受持ト合級受持トノ得失」と題し、授業生を用いての単式受持と正格訓導による合級受持の得失が論じられていることから確認される。してみると同一人物による僅か3年を隔てた2つの論説において、「単級教授」という用語が全く対照的とも言い得るような、異なった意味で用いられていることは極めて興味ある現象と言わなければならない。こうした現象の背景として、ここで当時の「単級」という用語についての一般の理解のされ方を考察してみる必要があるように思われる。

確かに明治19(1886)年の文部省令第8号について、それを単級学校に関する法令とする見方が存在したし(事実松本頁はそう見做している)、この頃より諸外国の単級学校の紹介が活発化してはいる。しかし単級学校が制度として確立していない当時において単級学校における教授法を「単級教授」と称し論及した松本の明治19(1886)年時の論説は、極めて先進的なものであり、それだけに一般には理解され難いものであったと察せられる。そのことを裏づけるかの如く、当時の雑誌記事等に目を配ってみると、たんに「単級」という用語に出くわすが、それが決して単級学校などではなく単式(一等級一教員)受持の意味で用いられている場合が意外と多いのに気づき驚くのである。2～3の例を挙げると、例えば『教育時論』49号(明治19年・1886年8月)の「授業生改良ノ方案」との記事中「鄙村教員ニ乏シク一人ニシテ三四級ヲ担当スル位ナレバ勢開發教授ヲ施スコトヲ得ザルニ依レドモ随分單級ヲ受持チナガラ完全ノ教授ヲ施サザル者アリ⁽¹¹⁾」(傍点引用者)とあるし、また同じ頃の『信濃教育会雑誌』中「合級教授論」と題し「抑モ合級教授ハ單級教授ノ完全ナルニ如カサルヲ固ヨリ論ヲ待タスト雖モ學費ヲ節減センカ為ニ已ムヲ得ザルヨリ此ノ方法ニ依ルモノ⁽¹²⁾」とあるが、ここにいる「単級教授」とはいずれも合級教授に對置される一等級一教員受持による単式教授の意味であることが認められる。

明治19(1886)年12月刊の『教育報知』掲載の能勢栄の演説中の次の引用部分は、「単級」「合級」「連級」「無

等級」という当時の教授法に関する用語の理解についての一般的状況を示しているものと言うことが出来る。

「従前学級ノ編制ハ概ネ単級ニシテ一人ノ教員カー時ニ一級宛受持ツヘキ仕組ニシテ若シ一人ノ教員カ已ムナク二級以上ヲ同時ニ受持ツ場合ニハ合級教授ト称シテ二個以上ノ組ヲ一教場ニ併列シ同時間ノ中ニ異ナルヲ別々ニ教授スルノ法ナリシ爾来ハ連級教授法又ハ無等級教授法ニヨリテ学級ヲ編制シ二個以上ノ組ヲ一教場内ニ併列シ同時間ノ中ニ同シヲ一諸ニ教ヘルヲニセハ八九十人乃至百人位ノ生徒ヲ一人ニテ教授スルコトハ格別六ヶ敷事ニアラサルヘシ⁴³⁾」(傍点ママ)

このように「単級」を一等級一教員受持の意味で用いるということが、果たして第1次小学校令期において盛んになるドイツ等の単級学校の紹介を契機とする、その「単級」を従来の等級概念をもって解釈する、いわば誤解によるものであるのか、それともそれ以前から一等級一教員受持を「単級」と称する慣例があったのかは、ひとつの大きな究明課題であり、必ずしもここで確言はし得ない。がしかし例えば明治17(1884)年5月刊の、合級教授に関する最初の本格的理論書ともいべき伊東忍著『小学合級授業法』の「自序」中、「世ノ授業法ヲ説クモノ単ニ緻密ノ論理ト方法トニ涉リ師範学校並ニ生徒多クシテ資本ニ富メル校即チ単級受持ノ場合ニアラザレハ輒ク適用シ得ラレサルモノニシテ説ノ合級授業ニ渉ルモノモ之レナシ⁴⁴⁾」(傍点引用者)とあることなどから、単級学校がわが国に紹介される第1次小学校令期以前より一等級一教員受持を「単級」と称する場合があったことが事実として確認されるのである。こうした用語事例から推してみると松本頁のように明治19(1886)年当時に単級学校の教授法の意味で「単級教授」と称することは一般には理解され難いことであつたと同時に、否むし誤解を招く恐れが多分にあることでもあつたことが容易に想像されるのである。彼が明治22(1889)年の論説において「単級教授」という用語を標題において避けたことの理由の幾分かは上述の如き事情をもつけ加えることが出来るかと思う。

(3) 文部省令第12号公布(明治25年・1892年)後の「合級教授」論——『実験教授術 全』の公刊——

さて松本は明治25(1892)年に石辰二郎との共著において普及社より『実験教授術 全』との著書を刊行している。この書の目次構成をみると先ず第一編「総論」では教授に関する一般的な原理が述べられ、次に第二編「各科教授法」においては修身科、読方科、作文科、習字科、算術科、図画科、唱歌科、体育科、地理歴史科等の各教科の教授法について詳述されたあと第三編が「合

級教授法」となっている。第三編の目次を摘記すると「第一 総論、第二 教授法ノ種類及其得失、第三 単級受持ト合級受持トノ得失、第四 合級教授ノ教室、第五 合級教授の教授器具、第六 合級教授の教師、第七 合級教授ノ生徒、第八 合級教授ノ規律、第九 合級教授ノ時間割、第十 実地授業法」となっており、そしてその内容は彼が明治22(1889)年時に『教育週報』に連載した「合級教授ノ学校」と題する論説記事をほぼそのまま収載した形になっていることが確認される。ところで単級学校を規定した明治23(1890)年の小学校令及び翌24(1891)年の文部省令第12号(学級編制等ニ関スル規則)公布後の明治25(1892)年という時点で「合級教授法」を編題として掲げるような教授法書を公刊していることは極めて注目すべきことと言わなければならない。周知のように文部省令第12号の「説明」においては、級概念に関して「本則ニ於テ学級ト称スルハ一人ノ本科正教員ノ一教室ニ於テ同時ニ教授スヘキ一団ノ児童ヲ指シタルモノニシテ従前ノ一年級二年級等ノ如キ等級ヲ云フニアラス⁴⁵⁾」と等級概念から集団概念へと転換したことが明示され、それに基づいて一学級からなる単級学校と複数学級から成る多級学校との種別が規定されることとなる。したがってそれ以後は、従前の等級概念に依拠するところの「合級」という用語は文献上もめっきり影を秘そめていくという現象がみられるのである。そうしたなかで「合級教授法」を一編として編んでいる『実験教授術 全』の公刊は、いわば「異端児」的存在とも言うべく、教授書史上も極めて注目に値する書物と言うことが出来るのではなからうか。そうした事情を多少とも窺わせるかの如く本書第三編「合級教授法」の「前書き」ともいべき部分に、小文字による次の文章が添えられている。

「本文ノ級ト称スルハ文部省令第12号ニ云フ級ニハアラズシテ従前一年級二年級ノ級ナリ省令ニ云フ部ニ当ル然ルニ合級ノ文字ヲ用ヒシハ従来ノ襲用ナルト他ニ適當ノ文字無キトヲ以テ姑ラク之ヲ用ヒテ題目トセリ讀者宜シク文部省令ノ級ト混同スルナカレ⁴⁶⁾」(傍点引用者)

つまり本書の叙述は、文部省令第12号公布による級概念の明確な転換への自覚を踏まえており、そのうえで敢えて従来の等級概念による「合級」用語の使用であるとのことわりが執筆自身において語られているのである。それでは何故にそれまでして「合級」という用語を使用せざるを得なかったのであろうか。そのことについては同書中の次の引用部分が参照されるのである。

「今や文部省ハ省令第12号(明治廿四年十一月)ヲ以テ学級編制ニ関スル規則ヲ定メ単級学校多級学校ノ区別ヲ明ニシ一教員ノ受持生徒数ヲ定メラレタレバ爾今此

省令ニ基キテ単級学校又ハ多級学校ニシテ合級教授ヲ行フモノ必ズ多カルベケレバ從テ其準備ヲ整頓セザルベカラズ^{四〇}」(傍点引用者)

すなわち単級および多級とは学校の種別を示す用語であって教授法用語としては避くべきこと、教授法用語としては級概念上の問題はありますが「合級教授」を用いるとの方針が窺えるのである。そして単級・多級の両学校を通じて行われる、彼のここにいう「合級教授」こそちに「複式教授」と称されるに至るものである。後述するように第2次小学校令期においては、学校形態の大部分を占める単級学校における教授法を「単級教授法」と称し理論形成を推し進める立場とともに、「単級」とはあくまでも学校の種別であって「単級教授(法)」との呼称自体を批判する見解がかなり根強く存在していた事実を見逃すことが出来ない。そうした対立論争のなかから「単級教授」に代わる「複式教授」という呼称が一般化していくのであるが、『実験教授術 全』における先程の叙述はそうした推移展開を予期的に示唆するものでもあったと言うことが出来よう。それでは次に第2次小学校令期における教授法用語としての「単級」を巡る2つの相対立する見解について考察することにしよう。

2. 第2次小学校令期における教授法用語としての「単級」を巡る2つの対立的見解

(1) 「単級」「多級」は教授法上の用語ではないとする見解

明治24(1891)年11月公布の文部省令第12号(学級編制等ニ関スル規則)においては、その第1条に「全校児童ヲ一学級ニ編制スルモノヲ単級ノ学校トシニ学級以上ニ編制スルモノヲ多級ノ学校トス^{四一}」と単級学校および多級学校について定義している。以後単級に関する論説が雑誌上を賑わすことになるが、それらのうちには、単級・多級とは学級数(教員数)の単複による学校の種別を示すものであって教授法上の区別を示すものではない、したがって「単級教授」などという呼称自体おかしいことであるとする見解が少なくない。いくつか例示しよう。例えば三重県の「南畝生」は『教育時論』に「単級辯」との論説を寄せ「単級ノ文字、一たび文部ノ法令ニ見ハレテヨリ、世上其意義ヲ解スルモノ区々ニ涉リ、甚シキハ、直ニ教授ノ上ニ冠スルニ単級ノ字ヲ以テスル者アルニ至ル。余輩ノ解釈ニ依レバ、単級ノ文字ハ……只多級ノ学校ニ対スル差違ヲ示スニ過ギザルモノニシテ、即管督管庁ノ調査ノ必要ヨリ生ジタル文字ナラン。教授上、若シクハ管理上ノ必要ヨリ生ジタル文字ニアラザルベシ^{四二}」と述べ、続けて「儼シ其ノ単級教授説ヲ唱フルモノニ至リテハ、実ニ余輩ノ怪訝ニ堪ヘザル処

ナリ。学校ニ単級アレバ、教授ニモ単級アリトノ説ハ、余輩ノ服スル能ハザル処ナリ。……要スルニ、分合会離ハ、数多学年ノ児童ヲ一教室ニ罔鑾セシメ得ル、単級学校ノ教員其人ノ妙用ニ属スルモノニシテ、別ニ自ラ単級教授ナルモノアルニアラザルナリ^{四三}。」と述べている。また木下邦昌が『教育時論』に寄せた「単級教授のことについて」との論説に於いても「近来単級教授法とて、教授法に一の別法あるが如く言ふものあれども、単級、多級は必竟学級編制上の区別にして、教授法の区別にあらず^{四四}。」とも述べられている。『教育報知』誌上の「単級学校教授法。白河 小野生寄稿」との論説においては、単級学校とはドイツにおける「ウンゲタイル、ホルックス、シュレー」すなわち「無等級平民学校」の翻訳であり、「斯ク単級トハ学校ノ名称ナルニ近来単級教授法ナトノ名称アルハ誤謬ノ甚シキモノナリ^{四五}」と指摘されている。埼玉師範学校教諭須永和三郎は「単級教授ノ一班」との論説において「抑モ単級小学校ト云ヒ、多級小学校ト云フハ、単ニ其就学児童ノ多寡ニヨリ、其編制方ヲ異ニシタル称呼ニシテ、性質上決シテ相違アルモノニアラズ。随テ又単級教授、或ハ多級教授ト称スルモ、敢テ其教授ノ理論ヲ異ニスルニアラズシテ、唯其方法及手続ノ上ニ、多少ノ差異アルニ過ギズ^{四六}。」と、すなわち単級、多級といっても教授法ないし教授の理論を異にするものではないことが強調されている。

上にいくつか示したような見解が少なからずみられたことについては、抑々単級学校の成立が主として経済上の動機からであって教育方法上の見地からではないという成立事情も少なからず関わっていると言えよう。例えば某論説においては「抑新小学校令ニ於テ或地方ニ対シ是非ニ単級学校ヲ置カシメントスルモノハ主シテ経済上ニ原因スルモノタルノミ何ソソレ余輩教育者間ノ為スヘキ研究スヘキ教授ノ方法ニマテ之ヲ強制セントスルモノナラン^{四七}」との見解すらみられるのである。しかしいかなる成立動機によるものにせよ、成立後の単級学校の得失については、経験に基づいての考究がなされたのであった。おまかに言って単級学校は、その経済上、学校管理上、訓育上の利が認識され、教授上はあまり利がないとみられたようである。学級数の単複に基づく単級学校、多級学校の種別は、学校編制論、学校管理法の観点からは重要な区分と言うべく、当時及びそれ以後の学校管理法関係の書冊においては大概単級・多級の種別を軸にした叙述構成がなされているようである^{四八}。教授法に関しても、単級学校における教授法のあり方は重要な研究課題として明治20年代後半期を中心に大いに研究と実験がなされたことは前稿(註1)掲出)でも考察した通りである。しかし先程も述べたように、単級学校の成立

動機、及び学校種別としての単級・多級が必ずしも教授法上の相異（区別）を意味するものではないという事情等から、「単級教授法」ないし「単級教授説」といった呼称に対しては、当初から少なからず疑問が投げかけられていたのであり、そうした疑問、批判は明治30年代以降の単級学校数の相対的低下のなかで、一層顕著なものとなり、次節に述べる「合級」用語否定論と相俟って、双方の立場を止揚する形で「複式・単式教授法」との呼称が一般化していく結果を導いていくことになる。次に「合級」用語否定論の立場についてみておきたい。

(2) 級概念に着目しての「合級」用語否定論

以上みてきたように単級学校の成立動機との関連で「単級教授法」等への呼称に対する批判がある一方、主として級概念に着目し、級概念が等級から集団へと転換した以上は、従来の等級概念に拠る「合級」用語は廃さるべきとする主張もかなりあった。明治28（1895）年夏文部省主催による単級教授法講習会に於いて講師をつとめた黒田定治²⁴は、その立場の代表的人物のひとりと言ってよいであろう。すなわち『埼玉教育雑誌』に掲載された湯浅虎五郎の筆記によると、その講習会における黒田定治の講習内容は第一章 序論、第二章 組分け、第三章 時間表、第四章 校舎校具、第五章 教授、第六章 訓練、第七章 准教員という具合であったが、第一章「序論」の第一は「単級ト云フ意義」となっている。その内容を紹介すると、「単級」という用語が法制上現われたのは明治23（1890）年の小学校令、翌24（1891）年の文部省令第12号においてであるが、その実質的起点は明治19（1886）年の小学校令に求められるとして次のように述べている。

「単級ノ用語ノ法令上ニ現ハル、ヤ人之ニ著目シ或ハ舶来直訳ノ評語迄附スルニ至リシカト我国ニ於テハ已ニ其萌芽ヲ出シ文部省ニ於テモ之カ研究ニ注目セラレ次テ著述ニ出テ実地教授ニ現ハレ茲ニ漸ク世ニ出テ法令トナリ各県尋常師範学校附属小学校ニ設置スルコトナリ以テ研究ノ今日ニ至レリ然レハ単級ノ名ハ小学校令ニテ始テ生レ出テ文部省令第12号ヲ以テ明瞭ナル意義ヲ確定セラル、ニ至リタレモ其実已ニ暗々裏中ニ実行セラレ第一号（十九年文部省）小学校簡易科要領ニ所謂児童六十人以下ノ場合ニ於テハ等級ヲ分ツコトヲ得ストハ実ニ単級ノ編制法ヲ云ヘルモノナリキ²⁵」

次に「第二 単級ニ関スル誤謬ノ見解及合級教授トノ区別」の項においては明治19（1886）年の文部省令第8号公布後は級概念が等級（grade）ではなくなったことを指摘したあと「茲ニ注意スヘキハ合級ノ語ナリ現今尚ホ合級ノ語ヲロニスレトモ省令第8号発布以後ハ已ニ其名

アルヘキ理ナシ已ニ一人ノ本科正教員ニテ受持ツ上ハ生徒等級ノ区別アルニ関セス其一同ノ生徒ヲ一等級ト称スヘケレハナリ²⁶」と「合級」用語は当然廃さるべきことを述べている²⁷。

黒田と同様「合級」は廃さるべきことを主張した人物に高等師範学校訓導藤原覚因がいる。彼は明治31（1898）年に雑誌『教育実験界』に「単級に付て」と題し論説を展開しているが、第一「緒言」、第二「単級とは何ぞや」に続く第三「合級なる名詞は死せり」の章において「学級編制規則の施行に伴ひて合級なる名詞は死没せるものなるに今日に於て尚往々此語を用ひて怪まざるものあり、曰く一年二年の合級曰く単級は其の合級なりと豈甚しきことにあらずや、吾人は此の死語を区別して誤解に陥らざるやう注意せざるべからず²⁸」(傍点ママ)と述べ、合級と単級の教授法上の相違を級概念との関連において次のように説明している。

「抑も合級の級は明かに一年級二年級など云ふが如き階級の級を表示し単級の級は正しく団体の級を意味せり、則ち合級は部分定まりたる^(マ)象合体を意味し、各級共に一定して決して其間に相侵すべからざる区界を有せるものなるも、単級は教授上の都合に由りて分合自在になすべく、之を分てば二三組となり之を分たざれば全体一組なり、故に或時は合級の如き状態を生ずべく或時は一学年の学級なるが如き観を呈すべし、之を要するに単級は教科の性質に由り効授上の都合を謀り、最も生徒に利益なる方法を選択して或は二三分し或は一組となす等、時と場合とに依りて便宜なる分合を^(マ)作し得るも、合級は其の各級の作業すべて異なるべきが本来の性質にして、現在の学級制度とは甚だ相違し統合連絡等の教授上の便宜はなきものなり。されば吾人は此の語を死物として迷はざるやう注意せざるべからず²⁹」(傍点ママ)

すなわち上述するところによると、「単級」教授こそ組の分合、教科日の統合や連絡等の教授上の様々な便宜を実施しうるものであるが、「合級」は「各級の作業すべて異なるべきが本来の性質」であってそのような便宜がないものとしている。しかしそうした批判は、言ってみれば級概念に即しての原理上の批判であって、第1次小学校令期以降積み重ねられてきていた合級教授法改良の動向、及びそのなかでの合級教授の実質や中味に対する批判とは言い得ないように思われる。そうした憾みは感じられるが、兎も角も原理的に「合級」という用語そのものを不適としているのである。ここではさらに「単級教授」との呼称、理論のなかにヘルバルト派教授論の核心とも言うべき教科の統合や連絡といった原理等を含み込ませている点も注目される³⁰。

教科の統合や連絡などは一教員による単級学校ゆえに

実施しやすいということもあったようである。同じ論説において彼は単級制の得失として訓練の統一、能動自治の精神、家族的情愛といった訓育管理方面の利、また教授上も能動練習の長所と並んで教科の統合連絡の利があると次のように述べている。

「単級学校に於ては教師一人なるが故に、連絡統一は教授上必頂の要件として之を保ち易しと雖、多級学校に於ては数人の教師に分るゝが故に、連絡統一を欠き易しとす⁹⁰。」

単級学校における組分けも種々の観点より成されるが、単に生徒の年齢学力のみでなく多分に教科の性質、教授上の都合により自在に分合しうる点に「合級」と異なる「単級」教授の特質があるとしている。すなわち明治32（1899）年5月刊の『尋常高等単級教授新論 全』において彼は、「単級の組別」に関し、組別を定める標準として①生徒の学力年齢、②各学科の性質、③教授上の都合（ウィルヘルム、パイフェル氏単級学校ノ理論及実地）の三つがあるとしているが、ただし「専ら学力年齢ノミニ基キテ組別スルハ、一般学校ニ於テ用ウル所ナルモ、単級ニ於テ只之レノミヲ用ウルコト、スレバ、四年ノ尋常単級、若クハ高等単級ハ、合級教授ノ誤謬ニ陥リテ、教授ノ錯雑ヲ省キ、且ツ生徒ノ利益ヲ比較的多ク謀リ難キナリ。……故ニ又学科ノ性質ヲ考ヘ、教授上ノ都合ヲ謀リテ、組別セザルベカラズ⁹¹。」と述べている。

以上第2次小学校令期における教授法用語としての「単級」の可否を巡る2つの立場をみてきた。ひとつは元来「単級」とはあくまでも学級数の単複による学校の種別を示すものであって、教授法、教授理論の固有性を示すものでないとする見解、それに対するのが、級概念に依拠し「合級」用語を否定し、「単級教授」の呼称のもとにヘルバルト派教授法の原理をも含み込ませ理論化していこうとする立場であった。しかし後者は例えその理論に指導性があつたとしても、「単級」の呼称そのものが単級学校に依拠している以上、その呼称と理論の適用範囲のズレという不都合さは免れ得ないのであり、そうした問題性は明治20年代末から30年代にかけての単級学校数の相対的低下（＝多級化）傾向⁹²のなかで一層強く認識されるようになったといつてよいであろう。次章では、そうした批判的認識のなかで「単級・多級」に代わり「複式・単式」が教授法用語として一般化していくプロセスについてみておきたい。

3. 「単級・多級」教授法から「複式・単式」教授法へ——明治30年代の多級化傾向のなかで——

明治27（1894）年8月刊の『各種学級教授法』（与良態太郎著）の「序言」に次の叙述がある。

「近來我政府ノ学級編制法ヲ定ムルヤ或ハ多級教授法トイヒ或ハ単級教授法トイヒ其多級ヲ説クモノハ単級ナキカ如ク其単級ヲ論スルモノハ多級ナキカ如シ余以為ラク多級トイヒ単級トイヒ等シク是レ教授法ナリ若シ能ク学理ニ通シ實際ニ明カナルモノアラバ一括シテ以テ其要ヲ得ベント是ニ於テ乎之ヲ并説スルノ必要ナルヲ知り亦我国今日ノ状況此ノ如クナラサルベカラサルヲ知ル⁹³」

このように「単級教授法」「多級教授法」などと称し互いに無関係に見做しがちな当時の風潮を批判したあと彼は次のように述べる。

「世間単級教授法ノ稱アレトモ今日ノ制度ヨリ見ルトキハ甚タ不精密ナリ如何トナレハ今日ノ制度ニテハ単級ハ多級ト相對シタル名ナリトモ多級ノ中ニモ二学年以上ヲ合シタル学級アリ此等学級ノ教授法ニ於テハ単級ノ教授法ト異ナル所ナキモノアリ故ニ単級教授法ノ名ハ広ク用フレハ名ニ於テ衝突シ狭ク用フレハ実ニ渉ラサル所アリ⁹⁴」

上に指摘の、単級学校と、多級学校の「二学年以上ヲ合シタル学級」いわゆる複式学級の教授法との共通性については、すでに明治25（1892）年7月刊の『単級学校附多級学校教授法』にも示唆されていた。すなわち同書の第四編「多級学校教授法」は僅か6頁程の叙述であるが、多級学校における2～3学年合併の教授法と単級学校の教授法とは繋がるものであるとして次のように述べられている。

「多級ノ学校ニ於テ一学級ノ編制ハ、一箇ノ学年ノ児童、或ハ二箇ノ学年ノ児童、或ハ三箇ノ学年ノ児童ヨリ成リ立チシモノナリ、而シテ一箇ノ学年ヨリ成リシ学級ハ、此ヲ一組トナシテ教授シ得ヘキヲ以テ、従来世ニ行ハレタル、多クノ教授法ヲ記シタル書ニ依リテ、十分其教授法ヲ知ルニ足リ、三箇ノ学年ヨリ成ル学級ハ、此ヲ三組ニ分ツヘシ、其教授法ハ凡テ第三編第二章ニ記載シタル三組ナル単級学校ニ於ケル教授法ニ拠ルヘシ……故ニ多級学校ノ教授法トシテ此ニ記載スヘキハ即チ二箇ノ学年ノ児童ヨリ成ル一学級ノ教授法タルニ過キス⁹⁵」（傍点引用者）

当時学校種別としては単級・多級の二種に区別されつつも、多級学校中に複数学年で編成された複式学級はかなり存在しており、かつそれは明治20年代から30年代にかけての多級化傾向のなかで一層増加しつつあったということが出来よう。したがってその複式学級の教授法に関する指導理論が要請されてくるのであるが⁹⁶、ここに単級・多級という学校の種別に依拠した用語法の不適当な点、教授法の立場からは単式か複式かという学級編成の種類、学級の性質に着目しての用語法が、より妥当なものとして確立されていくこととなる。例えば、明治

32 (1899) 年12月発行の『教育時論』の論説「学級の性質を論じて単級の語意を明かにす」においては、「今や教育に関する用語中単級と云ふ語が本来有せる意義以外に迄妄用せられ為に学校事業に少なからざる障害を与へつゝあるを見る⁹⁹。」と述べ、その「妄用」の実態について、当時「単級」という用語が、単級学校以外に「単級に編制せる学級」(多級学校において修業年数と同じ数だけの不同の学年から成る学級をこう称した)、甚しきに至っては総ての複式学級の意味に用いられるなど、「所謂汎意の禁を犯すもの⁹⁹」と批判している。そして「余輩は単級学校を研究することの益々精ならんことを望むと共に学級特に各種の複式学級を講究することの極めて緊要なることを大に唱導せざるを得ざる也⁹⁹。」と述べ、その複式学級の名称として、二箇学年から成る「雙式」、三箇学年から成る「鼎式」、四箇学年から成る「角式」との名称案を提唱している。このように「単級・多級」に代わる教授法用語の模索のなかで、次第に「複式・単式」へと用語が統一されていくようである。そうした用語の模索の状況について栃木県地方視学鈴木亀寿著『視学要言 模範学校』(明治32年・1899年)には次のようにある。

「単級学校と云ふは可なれども、単級教授法と云ふは不可なり、何となればこは学校を区別する名称にして、学級又は教授法の区別にあらざればなり、而して、他の連級合級等の名も固より当らず、故に此場合に於ける教授法を命名せんには、或は甲種学級、乙種学級の教授法と呼び、或は単式教授法、複式教授法と云ふを可なりと主張するものあり、又谷本氏は、単級学校の教授法を、一級教授法とし、一学年一学級の場合を、単級教授法とし、之に対し二学年以上を一学級となせる場合を、複級(或は多級)教授法となすべしとのことなれども、余は単級学校の教授法と、多級学校に於て、二学年以上を一学級となせる場合の教授法とは、之を分つての要なしと考ふるを以て、通して合組学級教授法、又は単に合組教授法と呼ぶを最も穏当なりとす⁹⁹。」

単級学校及び多級学校における複式学級の教授法を併せて「乙種学級教授法」「複式教授法」「合組(学級)教授法」などと様々に名称の模索があったようであるが⁹⁹、「複式教授法」という名称を強く主張した有力な人物のひとりに新潟師範学校教諭加納友市がいた。彼は雑誌『日本之小学教師』第1巻第2号(明32・5・15)以降数号にわたって「教育界の雑評」との記事を連載し、そのなかで次のように述べている。

「曰くこは単級教授法なり、我輩の学校は多級なれば、全く関係なしと、従ふて教科書も是等の編制に適する者なく、教授学も之を説くもの少なく、始終変則の仕

通しと云ふ有様にて推し行かば、如何でか教授の効果の挙るべき理あるべき、多級児童の迷惑実に憐むべき者なり。故に余輩は、教授の方法を単級多級などゝ、学校の種別より立つことは甚不当と思ひ、教授の目的物たる児童の団体、即学級の編制の種別により、単一の形式に由る者を単式教授とし、複式の教式を取るべき者を複式教授とせり⁹⁹。」

そして殊にわが国のような山岳崎嶇、村里相隔絶せる地勢の土地柄にあっては複式編成の学校が極めて多いのに「此等の編制に必ずべき教材の排列方、教授の実行法等の研究は、或部分を除くの外は、殆んど度外に措かるゝ現況なるが如し⁹⁹」と複式教授の研究が極めて不充分であることを指摘している。

以上述べたような経緯から、殊に明治30年代以降、複式教授に関する研究が盛んになされるようになるが⁹⁹、その理論の内実は今までの考察において明らかにされたように従来の合級教授法(明治10年代)、単級教授法(明治20年代)を多分に継承しているものとみてよいであろう。換言すれば明治20年代(第2次小学校令期)における「単級」教授法の研究は、従前の合級教授研究の内実を継承しつつ(註1)(2)掲出拙稿参照)、単級学校の法制上の成立に呼応し、単級学校が学校形態の支配的位置を占めた時期の教授法理論として現実界への指導性を有効に発揮しえたのであるが、本稿で考察したように、「単級」という呼称そのものに内包されている問題性の認識、批判の昂まりが、単級学校数の相対的低下と相俟って、その理論の内実を「複式教授法」に譲り渡していくことになったと言うことが出来よう⁹⁹。各々成立契機を異にしている「合級」→「単級」→「複式」という教授法理論の系譜は、その呼称自体に各時期の学校形態のあり様が如実に反映されていると言うことも出来よう。

註

- (1) 拙稿「第2次小学校令期における単級教授論の紹介導入と展開」(『弘前学院大学・短期大学紀要第17号』1981年3月刊)。
- (2) 例えば明治22(1889)年刊山田邦彦著『単級教授法』などがある。拙稿「単級学校教授法の形成過程における第1次小学校令期の位置づけ」(同上紀要第16号、1980年3月刊)参照。
- (3) 松本貢の経歴。明治12(1879)年6月、東京師範学校小学師範学科卒業。約1年間、熊本師範学校に訓導として奉職のち栃木師範学校教諭として赴任、下野私立教育会の設立に尽力。明治20(1887)年上京、高等師範学校訓導となり黒田定治とともに単級教場主任となる。明治26(1893)年ごろまで東京府尋常師範学校教諭兼小学督業として活躍。明治30(1897)年頃、青森師範学校教諭を短期間務めたのち長野県上田の小学校長となる。(『明治の教育ジャーナリズム』木戸若雄、近代日本社、昭和37年刊 97~100頁参照)
- (4) 註1)掲出拙稿中の図表(中央教育雑誌における「単級」

「合級」を見出しとする記事数の推移)を参照されたい。

- (5) 「単級教授ノ方法及び得失 松本貢稿」『教育時論』74号(明20・5・5) 8～10頁。

- (6) 同時同科主義はこの頃有力な説として定着しつつあったようである。例えば徳島県在住の柳生寧成は同県師範学校附属小学校での実践について「旧膳師範学校附属小学校ノ教場ヲ取り広ケ四間ニ八間ノ教場ヲ設ケ合級教授授業法ヲ種々試ミ居リ候併シ何分右方法ハ設置以来尚日浅キヲ以テ其良方法ヲ発見致シ申サズ日々苦慮致シ居候」(『在徳島県柳生寧成君ヨリノ来翰』『東京若溪会雑誌』51号 明20・4・20 18頁)と述べ、その工夫内容として「去月下旬ヨリ合併教授ニハ同科目ヲ同時ニ致セシ方却テ管理上都合ヨロシトノ説ヲ聞キ其ヨリ種々工夫致シ昨今デハ三学級(一年生、二年生、三年生)ノ三組ヲ合併致シ候処大ニ都合ヨロシク……兎モ角モ三級組ニ異種ノ科業ヲ課スルヨリ同科業ヲ課スルノ便ナルヲ発見致シ候云々」(同上)と報じている。さらに追って次の報告においても「附属小学校ノ授業ノ儀過日報道セン通り同時ニ同科ヲ教授スルノ方法益々宜シク先ツ其ノ方針ヲ以テ研究致シ居リ……」(『在徳島県柳生寧成君来翰』同上誌53号 明20・6・20 27頁)と報じている。同時同科を志向しての研究や実践の試みは明治19(1886)年5月の文部省令第8号の公布を契機に活発化したと言えようが、それ以前からも実践的試みはみられた。例えば岐阜県の山田大助は『教育時論』61号(明19・12)に「改正小学授業ノ方案」との論説を寄せ次のように述べている。「今予ガココニ陳ベント欲スル所ノモノ蓋又浅近ノ経験ニ因テ得タル所ニ過ギズト雖ドモ予ハ改正前生徒ノ多寡異ナリト雖ドモ己ニ二三ノ級ヲ一場ニ合シテ種ノ方法ヲ用ヒ遂ニ己下ニ陳ベント欲スルノ方法ヲ以テ今日合級教授ノ方法ヲ施サント考フルニ至リタリ……今仮リニ一学級ヲ第一年生第二年生第三年生及第四年生ノ四組ヲ合スルモノトナスモ予ハ曾テ同時同学科ヲ教授スルヲ以テ最モ良法ト考ヘタリ各組各異ノ学科ヲ授クルハ徒ニ勞多クシテ功少ナキガ如シ」(9～10頁)さらに同時同科を主張する理由について「凡同時ニ同科ヲ授クルトキハ管理巡視ノ行届易キノミナラズ一場ノ生徒皆同科ノ思想ヲ有シ他科ノ心ヲ奪ハルコトナク兼テ互ニ注目シテ助トナルコトアリ」(同上)とも述べている。

- (7) 「合級教授ノ学校(承前)。松本貢。」『教育週報』10号(明22・6・22) 2～3頁。

- (8) 各々の時間割例を掲記すると以下の如くである。

二級組合ノ時間割

土	金	木	水	火	月	日	時
乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	第一時
乙甲 修身	乙甲 唱歌	乙甲 修身	乙甲 唱歌	乙甲 修身	乙甲 唱歌	乙甲 唱歌	第二時
同	同	同	同	同	甲乙 体操	同	同
乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	乙甲 読習 書字	第三時
同	同	同	同	同	乙甲 算術	同	第四時
	乙甲 作文	乙甲 図画	乙甲 作文	乙甲 図画	甲乙 作文	同	第五時

三級組合ノ時間割

土	金	木	水	火	月	日	時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 習読	同	第一時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 唱	同	第二時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 体	同	同上
同	同	同	同	同	丙甲 乙 読習	同	第三時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 算	同	第四時
	丙甲 乙 作	丙甲 乙 画	丙甲 乙 作	丙甲 乙 画	丙甲 乙 作	同	第五時

四級組合ノ時間割

土	金	木	水	火	月	日	時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 習読	同	第一時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 唱	同	第二時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 体	同	第二時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 読習	同	第三時
同	同	同	同	同	丙甲 乙 算	同	第四時
	丙甲 乙 作	丙甲 乙 画	丙甲 乙 作	丙甲 乙 画	丙甲 乙 作	同	第五時
	同	同	同	同	丁 読	同	第六時

- (9) 「合級教授ノ学校。松本貢君。」『教育週報』4号(明22・5・11 4頁)

- (10) 「授業生改良ノ方案 在京 柳窪生」『教育時論』49号(明19・8・5) 4頁。

- (11) 「合級教授論 会員井上斎寄送」『信濃教育会雑誌』2号(明19・11) 1頁。

- (12) 「一教場内ニ入ルベキ生徒ノ数 能勢栄演述」『教育報知』47号(明19・12・18) 11頁。

- (13) 『小学合級授業法』伊東忍著 明治17年5月刊「自序」3頁。

- (14) 『明治以降教育制度発達史』第三巻 110頁。

- (15) 『実験教授術 全』(松本貢 是石辰次郎共著 普及社 明治25年4月初版出版。なお本稿では明治26年4月刊の四版本に依った。) 353頁。

- (16) 同上書9～10頁。なお「単級」「多級」はあくまでも学

- 校の種別を示す用語であるとし、教授法に関しては級概念上の問題はありつつも「合級教授」との呼称を用いようとする方針は他著にも若干みられる。例えば『簡易小学 合級教授法一斑』（伊藤貞勝校閲、阿部東作編纂 明治21年12月刊）中に「学級ノ解及ヒ合級教授ノ必要ナルヲ」との章があり、そのなかで「而シテ合級教授ト云ヘル所ノ級ハ則チ学力年齢ノ同一ナルモノヲ以テ分別シタルモノニ命セル所ノ名称ナレハ合級授業ト云ヘハ則チ単級学校カニ学級ノ編成ナル学校ノ教授法ヲ指スモノト知ルヘシ」（28頁）との叙述がみられる。
- (17) 『明治以降教育制度発達史』第三巻 106頁。
- (18) 「単級辯 三重 南畝生」『教育時論』264号（明25・8・15）35～6頁。
- (19) 「単級教授のことに ついて 木下邦昌」同上誌266号（明25・9・5）11頁。
- (20) 「単級学校教授法。白河 小野生寄稿」『教育報知』351号（明26・1・7）8頁。
- (21) 「単級教授ノ一斑 須永和二郎」『教育時論』284号（明26・3・5）21頁。
- (22) 「単級小学校」『教育報知』293号（明24・12・12）7頁。
- (23) 当時の学校管理法関係の著作を2、3紹介しよう。『新式学校管理法』（国府寺新作 相沢英二郎 成美堂 明治26年8月刊）は総論、学校規則論、学校編制論、学校分級論、学校分担論、学校席次論、学校課程論、学校作法論、学校整理論、学校費方論、学校儀式論、学校試験論、学校賞罰論、学校建築論、学校衛生論、学校教具論、学校経済論、学校表簿論、学校教師論の19章より成るが、「第三章 学校編制論」の章中「(七)単級法及多級法」の項があり、「単級法ニ於テハ生徒在学ノ年数ニ由テ階級ヲ有スル組ヲ作り多級法ニ於テハ其組コトニ一教室ヲ与フ……此法（単級法……引用者註）ノ大ニ行ハルハ独逸ノ村落学校ナリ」（43～4頁）とある。『実験小学管理術』（山高幾之丞 明治27年6月刊 金港堂）の第三章「編制」の章に於いては学級の定義が述べられたあと、学級編成法に「多級法」と「単級法」の二種があるとし、教授上の利は多級法にあるが訓育上の利は単級法にあるとしている。『小学校管理法』（和田豊編 東京同文館蔵版 明治34年刊）においては、第二編「本論」の第二章「小学校の種別」に関して、教科に由る種別として尋常・高等・尋常高等の三種、費用負担に由る種別として市町村立と私立、編制に由る種別として単級・多級・半日小学校を挙げている。
- (24) 黒田定治の略歴と人柄。文久3（1863）年11月越後国高田藩士として生まれる。資性謹慎にして温厚、幼にして学を好み、夙に俊秀の開えあり。明治3（1870）年藩学修道館に入学。同13（1880）年1月高田中学校卒業、翌月東京師範学校入学。明治17（1884）年6月同中学師範学科卒業、同時に附属小学校訓導、明治19（1886）年東京師範学校訓導、翌20（1887）年6月同校助教諭兼任。此間幾多の功績と経験とを積んで実験心理学者として次第に頭角をあらわす。明治23（1890）年3月福島県会津中学校教務取調を命ぜられ同校設立の事に当り経営画策、さらに同年10月師範学校取調のため3年間英仏独三国留学。明治27（1894）年1月帰国、高等師範学校教授となる。翌28（1895）年6月21日文部省の命を奉じて単級教授法講習会講師となり、その理論及び方法を講述せらるゝこと懇切周到、全国の単級学校の授業のために一新の気運に際会せり。明治29（1896）年12月附属小学校主事、31（1898）年10月女子高等師範学校教授を兼任し附属小学校主事を免ぜられる。黒田の人となりにについては「常に正実勤勉を其主義とせられ事々実験に徴し理論に訴へ、自重容よく言ひ軽々しく行ふ所なし。世の毀譽に閑せず、褒貶を意とせず正義に由りて止まる。されば世の情実の爲めに其の行を二にしてその説を変化す

- る如き才子に非らずして、君は寧ろ此意味に於いては剛直の教育者なりと君を知る人は評せり。」とある。（『高等師範学校教授 黒田定治君小伝』『日本之小学教師』第1巻第4号 明32・7・15 41～2頁参照。『明治・大正・昭和 教育思想学説人物史 第2巻』藤原喜代蔵著 685頁参照。）
- (25) 「単級教授法大要 湯浅虎五郎」『埼玉教育雑誌』145号（明28・10・5）6頁。
- (26) 同上7～8頁。
- (27) こうした黒田の講習等を契機に単級と合級の区別がより明確に自覚されるようになったと言えよう。雑誌記事に「高等師範学校には府県の訓導教員六十余名を会して、黒田定治氏の単級教授法を講ずるあり。府県にても、町村の訓導を尋常師範学校に会して、単級教授法を講習しつつある所あり、単級教授法と従前の合級教授法と何の区別もなきが如き弊は、是より除き去ることを得べきか」（『単級教授法講習の流行』『教育時論』372号 明28・8・15 35頁）とある。
- (28) 「単級に付て 高等師範学校訓導藤原覚因」『教育実験界』第2巻第5号（明31・10・10）25～6頁。
- (29) ヘルバルト派教授論と単級教授論とは本来は無関係であると言えようが、わが国においてはヘルバルト派教授論の核心とも言うべき教科目の統合や連絡は、単に教科論としてのみでなく単級というような学校編制論、学級制度との関連において受容されていると言えよう。
- (30) 「単級に就きて(承前) 藤原覚因」『教育実験界』第2巻第8号（明31・11・25）25頁。
- (31) 『尋常高等単級教授新論 全』（藤原覚因 富山房 明治32年5月刊）34～5頁。本書の執筆刊行の動機について著者は「序」において、我が国教育者中、単級教授の方法について研究しているものは少なくないが、「多クハ尋常単級ニ精ニシテ、高等単級ニ粗ナルノミナラズ、又往々誤解異説ノモノアリトス」と述べ、高等師範学校での長年の研究をもとに「曩ニ矢田部校長ニ申報シタル、高等小学単級教授論ヲ摘要シ、且ツ之ニ加フルニ此夏地方ノ講習ニ用キタル、単級講義ノ尋常単級ニ属スル部分ヲ抄録シテ一冊ノ小冊子トナシテ、印行スルコトナシム」と述べている。なお高等師範学校において特に高等小学校の単級教授法について本格的な研究を開始したのは明治29年頃のものである。（『高等小学科の単級教授法』『教育報知』507号、明29・3・3 22頁参照）
- (32) 佐藤秀夫氏は、単級学校数が顕著に減少化を迎えていく明治33（1900）年以降の、すなわち1900年代の状況について次のように述べている。「ところでこの期間（1900年代……引用者註）における学級編成実態の第一の特徴は、単級学校数がかなり顕著に減少していったことであった。尋常小学科をみれば、1900年度では依然単級校が最も多く7090校で、全数の32・33%と三分の一近くを占めていたが、1903年度に至って単級校5332校に対して二級校が5546校となり、編成上の最多数は単級校から二級校へ移行した。高等小学科ではすでに1899（明治32）年度以降二級校が最多であったから、今や小学校全体において単級学校方式が首位の座をおるようになったのである。就学の急上昇による児童数の激増という状況が、もはや前の時期のような単級学校主体論を事実において克服しはじめたことを示していた。」（『日本近代教育百年史第4巻 学校教育2』国立教育研究所編 1974年8月刊 945頁）氏はさらに、明治40（1907）年の義務教育年限延長を契機に学年別学級のいわゆる単式編成の学級が次第に増加していくが、複式編成の学級もかなりの比率で存在していたと推察し次のように述べている。『尋常小学科で単級校が二位となった1903年度において、四学級校が4177校と三位を占めていた事実

にも注目する必要がある。当時尋常小学校は四年制であったから、四学級以上の学級数をもつ学校では、ほぼ単式編成の学級、すなわち学年別学級が主体を占めていたと推測される。それにひきかえて三学級校以下では、何らかの形で複式編制をとらざるをえなかったといえる(同前書945, 948頁)

33 『各種学級教授法』(与良熊太郎 富山房 明治27年8月刊) 2頁。

34 『単級学校 附多級学校教授法』(原慶次郎編纂 文学社 明治25年7月刊) 216～7頁。

35 当時複式学級の教授法を「合級教授」と称し、その研究を促す者もいた。例えば宮城県師範学校教諭藤堂忠次郎は明治31(1898)年に雑誌『教育実験界』(第2巻第4号)に「合級教授の取扱に付て全国に質す」との論説を寄せ、「今日の小学の学級編制は多級ならざれば単級なり、而して多級の一種として、二個学年の両級を合併せる所謂合級といへるものあり」(6頁)とあり、かかる合級形態は「全国を見渡すに女子の高等科に於て最多く、男子の高等科三、四年之に次ぐり」(6頁、傍点ママ)と述べる。続いて「合級は特殊のものなり」と題し、その位置づけと研究の必要性を以下の如く主張している。「従来合級を以て多級の一群に編し、之を取扱ふこと多級に於けると大差なし、而して其の実相に於ては殆ど単級に近く、実行に於ては単級に摸倣すべきもの甚多し。然れども亦全然之を単級視すべからざるものあり、何となれば、単級は少くも三組以上を包含して教授力の配分広く而かも浅くなるに反し、合級は比較的其の余力を存し直接に提撕すべき機会も亦少しとせず、以て合級の多級に似て多級にあらず、単級に似て単級と相距る処あるを知るべし、之を特殊のものといふ敢て不可あるなし、然れども強ひて云はゞ合級は寧ろ単級の初段と見るべきなり」(6～7頁、傍点ママ)。また明治34(1901)年12月発行の『教育実験界』第8巻第12号に村田高等師範学校附属第三部主任の次の談話が掲載されている。「日本には単級も随分あるけれども、旧舎では合級組織の学校が一番多い、之は単級学校は熟練した教師でなければ甚だ遣り悪い、不熟練な教師が遣れば教師も出来ないし、生徒も亦非常な迷惑を蒙るから、合級にして尋常小学校を二組位にして教授するのは甚だ便利な仕方である。故に合級教授

の研究が余程必要である。」(「茶ばなし」62頁)。

36 「学級の性質を論して単級の語意を明かにす 宮崎 吉田升太郎」『教育時論』528号(明32・12・15) 9～11頁。

37 『視学要言 模範学校』(高等師範学校教授 文部省視学官 谷本富岡并序 宮城県師範学校校長 里村勝次郎関 栃木県地方視学 鈴木亀寿著 東京同文館蔵版 明治32年5月刊) 130～1頁。

38 「合組教授法」を用いた例として、『信濃教育会雑誌』172号(明34・1)に「一組学級ノ教授者ト雖合組教授法ヲ研究スベシ」との論説題がある。また甲種・乙種といった命名は明治20(1898)年11月刊『学級教授術 全』(白井毅普及社)にすでにみられる。すなわち同書中「学級ニ二種アリヨク同等ノ学力ヲ有スルモノ相集リテ一学級ヲナス是レ其ノ第一種ナリヨク学力不平等ノ者相集リテ一学級ヲナス是レ其ノ第二種ナリ」(15頁)とあり、その二種の授業法を各々「甲種授業」「乙種授業」と称し論じている。

39 「教育界の雑評(承前)新潟師範学校教諭 加納友市」『日本之小学教師』第1巻第4号(明32・7・15) 29～30頁。

40 『教育時論』480号(明31・8・15)以降数号にわたって「複式多級学校の教授につきて 石原和二郎」との論説記事があるが、この複式多級とは単式多級と単級学校との中間形態として位置づけられるものであり「複式多級の編成も、また経験上止むを得ざるに出てたるものなれども、これまた、得失ありて、その得失は、単式多級と単級との中間にあるべきか。」(10頁)とある。著作等においても『教授法(単式複式)』(前原仙太郎 明治33年8月刊)、『複式教授法』(平田直江 明治38年11月刊)、『複式教授の理論と実際』(加納友市 明治40年2月刊)、『複式兼用単級の教授及訓練』(黒田定治 明治41年10月刊)、『複式教授法全』(岡千賀衛 小林佐源治共著 日黒書店 大正2年5月刊)、『新複式教育』(小林佐源治 日黒書店 大正12年11月刊)など「複式」と銘打つものの増加が目立つ。

41 例えば上掲の『複式教授法』(岡千賀衛 小林佐源治共著 大正2年5月刊)において「後篇 各論」の章立ては第一章 二箇学年複式教授、第二章 三箇学年複式教授、第三章 単級小学校、第四章 全日式二部教授となっており、単級学校が複式教授の一種として位置づけられていることが窺える。

(昭和56年10月14日受理)